

解 説 Vol.2

「弘前藩庁日記ひろひよみ」（以下、「本書」という。）は、弘前藩庁日記に記述された事項中、歴史的に見て重要と筆者が判断した事項の現代語訳である。今回は、Vol.2として、その後半（1741年から1868年）をお届けする。また、Vol.1の訂正を付した。訂正は、パーソナルコンピュータで検索し易いよう、正誤表ではなく、全文の訂正とした。ほとんどが、「雨振」を「雨降」に・「獵師」を「漁師」と言うような、変換ミスとでも言えるようなものである。

以下に、若干の解説を試みる。筆者は、一般的な歴史・古文書等に知識があまりない、元気象屋である。現代語訳も適切ではない部分もあろうと思われるが、お許し願いたい。

解説はVol.1にも書いたが、一部の訂正・その後判明した事項を含めて再掲する。

1 弘前藩庁日記の特徴

1-1 日本史の中の弘前藩庁日記

弘前藩庁日記（以下、「本日記」という。）は、弘前藩が書き遺した毎日の日記で、寛文元年6月3日(1661年6月29日)から江戸時代末の慶応3年12月30日(1868年1月24日)まで存在する。約3300冊からなり、写本を並べた厚さは約85メートルである。誤字・脱字は当然あり、若干の欠落もある。弘前藩は、江戸時代を通じて主に青森県西半分を支配した、初期に4万7千石・末期に10万石の藩である。

本日記は、弘前市立弘前図書館に正本(和とじで、表紙に「日記」と書いてある。)とその製本された写本(コピーで表紙に「弘前藩庁日記」と印刷されている。)が保存されている。写本は常時展示され、正本と共に図書館内の閲覧室で閲覧・コピー(1枚10円)できる。持ち出しは、いずれも禁じられている。現代語訳は、「弘前藩御日記(上巻・中巻の2冊):田沢正」として、当初の10年間のみが存在する。天候のみの現代語訳としては「江戸時代における100年間天候記録:加藤慶司」(明和元年~元治元年)がある。しかし、入手は困難である。学術的調査としては前島郁雄・三上岳彦等も行っているが、一般向けには公表されていない。

本日記は、公的な組織が記録したものとしてはおそらく日本最古である。本日記に準ずる日記として古い順に、

八戸藩日記(青森県1665年から)

弘前藩江戸日記(東京都1668年から)

白杵御会所日記（大分県 1674 年から）

日光社家御番所日記（栃木県 1685 年から）

宗家日記（長崎県 1686 年から）

京都妙法院日次記（京都府 1694 年から）

南部藩次席家老日記（岩手県 1696 年から）

鳥取藩大目付日記（鳥取県 1697 年から）があるらしい。ただし、正式名称・記録開始年・記載事項は、確認していない。

当時は、もっと多くの藩が日記を書いていたと考えられる。しかし、火災による焼失、移封（国替え）等で他藩に見せないための焼却、裏返して習字練習用の反故紙としての有効利用などで消滅したものであろう。

個人の日記には、もっと古いものもある。しかし、日記と称しても日付が必ずしもない、期間が短いなどの問題があり、個人の視点であることが決定的な弱点である。本日記の場合同公的な記録であるからこそ、書けない事項もあった可能性がある。

1-2 本日記の記載内容

記載事項は、時代と共に若干変わる。弘前市立弘前図書館が昭和 45 年に発行した「弘前図書館蔵郷土史文献解題」によると、次の通りである。

「初期のものを省いて、定型的記事は、およそ、次の如くである。はじめに、その月の当番家老・用人・大目付・寺社奉行・郡奉行・町奉行・勘定奉行以下重要役職の人名を列記し、それから日毎の記事となる。月日と天候を記し、はじめに家老・用人・大目付の出勤状況をあげ、その次に祭祀・仏事および行事的事項や藩主の公的生活などがつづき、以下順序不同と思われるが、藩士任免・役替え・家禄の増減・家督・改名・縁組など士族人事に関する事項などが記され、また、褒賞・刑罰の記事は、士族に限らず町人・百姓にまで及んでいる。それから各方面よりの申し出・届け出・願い出とそれに対する決済や江戸からの飛脚の到着とその用状などがその主なものである。最後に、その日の御城当番人名を記して終わる。

以上の記事は、前にも記した如く諸帳簿類の記録集成であって、一応の基準にしたがって編集し、記事撰択については、日記方自身の見解で自由に出来なかった。（以下省略）」

ここに示された定型的記事以外には、年号・年とその干支・月・日・日の干支・屋外における死者・御家中の死亡・処刑（切腹・磔・火あぶり等の別）・岩木川の結氷が記録されており、地震・火災・洪水・死者を伴う雪崩・雹等の災害・狼等の被害・季節の献上物等も時々記載されている。食料・家・材木等の物資の値段も散見される。事故死の場合は、性別・年齢・身分も記載されている例が多い。ただし、死者が、自己紹介するはずがなく、推定であろう。

時代によって記載されているものとしては、関所の通行人数・切支丹（類族）の人数・

狩の収穫・飢饉の際の対応状況などがある。

御家中の休暇（湯治）願い・殿様の行列等の様子・正月等の挨拶の様子・能や狂言の番組・相撲・花火見物・祭の様子なども示されることがある。藩主は、参勤交代で、ほぼ1年おきに江戸と国許に住む。藩主の在国期間の記述が多い傾向があるかもしれない。

天候の変化・火災の発生等には、時刻もほぼ記述されている。1日の始まりと終わりの時刻は、現在と同様に夜間の0時を基準にしているはずであるが、日が昇るまでを昨夜としている例も見受けられ、よく分からない。時刻は、0時付近の子刻（または九つ）に始まり、丑刻（八つ）、寅刻（七つ）、日の出頃の卯刻（明六つ）、辰刻（五つ）、巳刻（四つ）、正午頃の午刻（九つ）、未刻（八つ）、申刻（七つ）、日の入頃の酉刻（暮六つ）、戌刻（五つ）、及び亥刻（四つ）と進む。午の上刻・后（後）刻・下刻などと細分されている場合も多い。日の出・日の入を基準にしている時間も季節的に変化するが、その精度は筆者には分からない。

1-3 読者と執筆者

本日記が想定した読者は、藩主であろう。弘前藩四代藩主津軽信政（五代目であるとの有力な説もある。）の命で作成されていて、そのための組織も作られている。幕府に見せることは、なかったと考える。幕府に提出した数値（例えば、犠牲者数）と本日記内の数値が異なることは、多くの文献が指摘している。読者は想像できても、その用途は分からない。執筆の遅れが数十年に及ぶことが（度々）あり、祖父の時代の事件を孫が書くようなこともあったらしい。

具体的な筆記者はその組織の担当者であるが、その原稿作成者は、公的な記録であり、不明である。しかし、本日記中に、「御家老並びに同役が（河童の子を）見て……」（享保13年7月23日）、「私宅に参会し……」（元禄13年2月14日）などの記述もあり、集まった人名等から「御用人」が主に書いたものと筆者は考える。御用人であれば御家老に次ぐ事務方の次席であり、藩内のすべての情報が集まっているのも当然である。夜間の天候等については、門番・鐘撞堂などの常時勤務の部署からの情報も用いたであろう。

1-4 記述手法

本日記は、縦書きで、和紙に毛筆で記録されている。事項ごとに「一」から始まる「一つ書き」である。

文字は、江戸時代の標準文字が中心である。したがって、「くずし字用例辞典：児玉幸多」等の辞典でほぼ読める。文章は漢文とかな交じり文が交じっている。かなは、カタカナ・ひらがながあり、変体仮名やその元の漢字も混じっている。例えば、時間の経過を、朝から昼までと示す場合、朝より昼までと記述する例が多い。この「より」の記述法として、

「自」・「従」・「より」・「ヨリ」・「よ里」・「説明できない形であるが（より）が合体した記号」があり、「自朝・従朝・朝より・朝ヨリ・朝よ里・朝（よりの合体記号）」のように記述されている。

「が・ざ・だ・ば」等の濁点は、例が少ないが用いられている。一方、「ば・ぴ・ぷ・ぺ・ぼ」の半濁点は、全く用いられていない。「は」と書いてある場合、「は・ば・又はば」と読み、「ば」と書いている場合は「ば・又はば」と読む。例えば「かっぱ」（河童）は、「かわわつは」10日ほど後には「かわわつば」と書かれている。当時の濁点・半濁点は、現代の絵文字のようなものだったのかもしれない。

地域的な方言・訛りは、一部の名詞を除きほとんどない。最近使われているいわゆる津軽弁は、全く使われていない。一方、文化が伝来した中国発祥の記述手法は、しっかり守られている。例えば、殿と様の使い分け、尊敬すべき名詞・動詞等に対する台頭・平出・欠字については、ほぼ守られている。

台頭とは、天皇等圧倒的に尊敬すべき対象・行動を記述する場合、行を替えかつ普通の行頭よりさらに上から書き始めること。平出とは、尊敬すべき対象・行動が文中にある場合、改行して行頭にすること。欠字とは、平出より軽微な尊敬表示で、一文字あけて尊敬を示すものである。ただし、本日記中には台頭の例は一度もなく、平出と欠字の用法の区別は判然としない。対象となる用語としては、勅許・崩御・殿様・若殿様・近衛様・御意・城・御公儀・仰せ付け・御目見え・御出などがある。

1-5 日付は正しいのだろうか

歴史的事実が生じた年月日は、比較的知られている。当時使用していた暦と現在のグレゴリオ暦との対照も可能である。例えば、「日本暦日原典：内田正男」によると、本日記が始まった寛文元年6月3日は1661年6月29日である。本日記から見られる歴史は、何月何日何時にどの村で何軒の火災があったというようなものである。日付まで分かることは、すばらしい事である。

私事にわたり恐縮であるが、健康診断の問診中に、「今日が何月何日かわからない時がありますか」というような項目があった。筆者は、回答に困った。ましてテレビ・ラジオ・新聞がない昔の人は、今日が何日であるかを確実に認識できたのであろうか。例えば、上の6月3日は、誰がどのような手段で確認したのであろう。幕府から届く公式の暦は、延宝4年（1676年）の例で70枚である。藩の地方機関（青森・鱒ヶ澤などの町奉行所、浪岡組・赤石組などの代官所、その他）だけでも30か所以上である。一般人に届くはずがない。

一方、弘前市立弘前図書館が昭和49年に発行した「津軽覚え書」には、弘前藩が慶長19年12月（1615年1月頃）の小の月を大の月とし、この後これを吉例として数年、月の大小を直したとの記述がある。本日記中にも、寛文2年8月30日（1662年）という、公式

の暦になかったはずの日付の日記がある。寛文2年8月は小の月で29日までしか存在しない。この前後には、公式の暦にあったはずの日付の日記が保存されていない例も少なくない。記録が始まった寛文元年6月3日から寛文2年末までの20カ月に限定すれば、1日～26日の保存されていない例が80日（日数518日）であるのに対し、27・28・29日の保存されていない例が18日（日数60日）である。月末の日付の日記が保存されていない例は、普通の日より明らかに（おそらく統計的に有意に）多い。何らかの意志が働いて、破棄されたことも否定できない。

本日記に書かれている日付が正しいとは限らない。恐らく、他の日記（例えば土佐日記の、浦戸をさして漕ぎ出でた日）においても同様であろう。しかし、本日記の日付は、古文書につき物の間違いを除き、恐らく正しいと筆者は考えている。延宝3年2月1日（1674年3月8日）からは日付に干支が付されており、日本暦日原典に示された干支との一致で日付にずれがないことが確認できる。それ以前についても、理科年表に示されている地震発生の日付（1662年6月16日（寛文2年5月1日）及び1662年10月31日（寛文2年9月20日）と本日記の記述が一致していた。また、藩内の行動を規制する日付の変更であるから、実施の場合は、日記に記述されると推定されるからである。

2 本書の編集方針

2-1 本日記の重要性

地球温暖化の問題点が指摘される中で、1990年にはIPCC（気候変動に関する政府間パネル）が設立され、1992年には第1回の評価報告書を発表した。次いで1996年、2001年及び2007年に発表している。これらの活動が評価され、IPCCは2007年のノーベル平和賞を受けた。次の評価報告書の発表は2014年のはずである。IPCCの評価報告書は、地球温暖化の過去・現在・未来、その影響、可能な対応策を調べてそれぞれの時点で評価している。この中の地球温暖化の未来予測は、主としてコンピュータ予測による。

未来の予測精度は、正しい・長期の過去データに依存するはずである。この場合の具体的な過去データとして、日本最古の日記は決定的な意味を持つ。しかしこのデータを読み取るためには、古文書を読める人が弘前市立弘前図書館に通わなければならないという制約もある。これを現代語に訳し、世間の皆さんに示すことが、幸い弘前市に住み、古文書も少しは読めるようになった筆者の使命と考えたものである。

2-2 記述する資料の選択

気象・農産物・気象災害等は、年周期をする。その主な理由は、太陽と地球の位置関係

であり、グレゴリオ暦が対応する。したがって本書の日付は、現在も用いられているグレゴリオ暦とし、当時の暦も付記した。暦の年号は、改元して数十日後に届く。当時の暦として、写本に印刷されている年号を書いた。(ここまでの現代語訳の信頼度は、100%と考えている。)

本日記中の日付の下には、その日の天候・地震・稀に二百十日などが記載されている。原本の記述方法は異なるが、すべて現代語に訳した。(信頼度は99%以上。)

天候等の次には本文があり、その中にも、初雪・岩木山の冠雪(「頂上に雪降る」というような表現になる)・積雪の深さ・地震被害の大きさなどの、天候に関係する事項が記述されている。これもすべて現代語訳しカッコ内に定量的に示した。ただし、主として意識である。(信頼度は99%以上。)

倒死(行き倒れ)・殺人・なだれ・落雷・刑死・牢死・自殺等の死者、自然現象の被害等の大きさ・季節の献上物(初茄子・初米・初鮭・三馬屋の梨子等)、食料の値段、関所の通行人数、岩木川の結氷(「十三の瀉氷張る」というような表現になる)、火災(林野火災も含む)、狩猟の収穫物、切支丹(類族)の人数、飢饉対応として御救い米を出した人数などは、可能な限りカッコ内に定量的に記載した。ただし、定量的とは言っても全部が記録されているとは限らず、明らかな誤りも見受けられる。計算した数値の再確認は、行わなかった。(現代語訳の信頼度は30~95%程度。)

特に見逃さないように注意したのは、初胡瓜・初茄子・初米・初鮭・初鱈・及び三馬屋梨子等の献上品、岩木山の初冠雪・十三瀉の結氷と瀉明けという季節現象、倒死(男女別)・刑死・牢死・熊狼・自然災害等による屋外死、火災・雪崩・雷・地震・土石流等に伴う被害の大きさである。(信頼度95%以上。)

食料(特に米)の値段についても見逃さないよう努力はしたが、卸値段・小売値段・地方による相違などが混在している。(混在を除く信頼度は90%程度か。)

記述内容として多い、御家中の休暇・大名行列の様子・正月等の挨拶の様子、宗教関係行事等、人類の将来に影響を及ぼしそうにない事項は除外した。また、献上物であっても、丹頂・菱食・白鳥・青鷺・雲雀・雉などの鳥類は、庶民の生活に関係しないと見て、原則として除外した。

飛脚の所要日数、欠字などの対象者の変化等も歴史的に意味を持つとも考えたが、重要とは考えなかった。ただし、筆者が興味をもつ事項は、稀に記述している。このような事項に興味を持つ読者・正確な数値に興味を持つ読者は、原文に当たっていただきたい。

現代語訳は、天候部分ではできるだけ原文どおり、その後の本文はその要点の書き下しを中心とした。パソコン(ワープロ)の変換ミスなどで読みにくいところもあるものと考えている。筆者の責任である。お許し願いたい。送り仮名が突然カタカナになったり漢字で止めるために読みにくいのは、原文に忠実にした部分も多い。

用語の解説は、文中以外には特に付していない。現代と異なる用語、例えばきふり(胡瓜)・かわわつば(河童)等は、なるべく原文を生かした。

2-3 本書の構成

左端に西暦（グレゴリオ暦）年月日を置き、次いで当時使われていた暦の年月日を記した。その右には毎日の天候等を記述し、1文字分のスペースを置きカッコ内に本文の意識を示している。毎日の天候の直後に括弧を付して天候の原文を示したものもある。日記が保存されていない日については、空欄（なるべくは説明をつけているが。）、日記に天候が記されていないものは「なし」と記述した。

1日分の記述は、原則として1行である。1行に入らない場合は、「上に続く」として前日の余白に「下から続く」の後に記載し、またはページ最下欄の予備スペースに記載した。稀に「下に続く」・「〇〇日に続く」とした例もスペースの関係で用いた。

1ページには、現代の暦の偶数月の月末で終わる2か月分を記載している。1年間は6ページで構成される。同じ季節現象の所在場所は、ほぼ6ページ前か後と推定できる。これが変動することは、気候変化等の影響である。

本書は、1661～1700、1701～1740、1741～1780、1781～1820、1821～1860、1861～1868年の各期間に分割して記述した。これでも各部が240ページになり、大き過ぎれば扱いに困ると考えたことによる。

2-4 本書の伝達手段

本日記は1661年から江戸時代末の1868年までの208年、資料部分は全体で1241ページとなる。1ページは、空欄があるものの63行×約100文字と、並の文献の比ではない。このため、本説明「解説 Vol.2」と資料部分はCD-ROMとした。同一内容のpdfデータ（読むためにはAcrobat Readerが必要である。）とExcel・Wordのみで読めるデータの二種類が入っている。これらの印刷・検索等の利用は、各自で行っていただきたい。

なお、お手元の本書の後半（Vol.2）は、1741年1月から1868年2月までの、約127年分763ページである。Vol.1の訂正の478ページも付した。

3 補足事項

3-1 本書利用上のお願い等

本書の記載内容は、筆者の読解力・時間の制約があり、間違いが少なくないと考える。しかし、日本最古の藩日記の現代語訳がその一部しか存在しない状況では、本書から読み取ったデータが日本最古のデータとなる可能性が大きい。例えば、気候変動に関して、

明治以降における雷日数は、明らかに増えている（という報告があるだろうと筆者は考える。）と思われる。しかし、江戸時代から現代までの雷日数がどのように変わっているか・季節ごとにはどうかなどは、恐らく発表されていない。夜間についても記されている本書データからこれを検討すれば、日本で初めてとなろう。河川の結氷・倒死その他のデータについても同様である。

本書中の pdf データと Excel・Word のみで読めるデータの二種類は、用途が若干異なる。pdf データは、データが簡単には破壊されない。目視・検索・印刷等の利用に適している。

後者は、コンピュータ本来の機能が利用できる。コンピュータの操作によってデータが容易に破壊されるが、データが変更された場合、「変更を保存するか」との質問が画面に出るので、変更しないように操作すれば元の状態に戻る。幼児等の操作には対処できない。

実際の利用例として、範囲を指定して「初雪」を検索すると、毎年の中雪の日付、ひいてはその変化が見えるかもしれない。これが変化していれば、地球温暖化等かもしれない。しかし、その前に存在した霰・あられ・雪・霰・みぞれ・雹・丸雪・みぞれ等の記述は、初雪ではないのだろうか。初雪の用語の定義を明確に理解しなければ、初雪を捕えたことにならない。また、上の霰・みぞれ・みぞれ、文目・刃のよう同じ意味で表記の相違等があり、検索にも知識が必要である。

読者諸兄のデータ利用・査読の付いた論文としての発表をお待ちする。

間違いの指摘・本書の意図に沿った助言等は、歓迎する。筆者略歴内のアドレスにいただければ、直接の返事ができるものがあるかもしれない。

本書の現代語訳は、退職後の 2003 年から始めた。古文書に関する知識は、全くなかった。図書館から紹介された佐藤吉長先生の講座、「弘前藩御日記」の著者で図書館に日参されていた田沢正先生に読み方を教わった。特に田沢先生には、度々席にお邪魔して教えを請うた。弘前市立弘前図書館の職員にも関連資料等に関してお世話になった。これらの方々なくして、本書はない。改めて感謝申し上げます。

本書については、著作権を主張する。しかし、印刷・コピー及びその配布並びに引用・参考文献としての利用は、出展が本書であることを明示すれば自由である。CD-ROM のコピー等は、出展を明示できる情報を添付して、他者に提供願いたい。この取り扱い、学術論文と同様と考えていただいて結構である。

3-2 各期間の特徴

1661～1700 年

年 号 寛文、延宝、天和、貞享、元禄

弘前藩主 信政

徳川将軍 家綱、綱吉

事 件 シャクシャインの乱（蝦夷地）への派兵、新田開拓、樋ノ口川留切り、
貞享の検地、那須家取潰し、津軽兵庫の越境、生類憐みの令、元禄大飢饉

1701～1740年

年 号 元禄、宝永、正徳、享保、元文

弘前藩主 信政、信寿、信著

徳川将軍 綱吉、家宣、家継、吉宗

事 件 元文飢饉

1741～1780年

年 号 元文、寛保、延享、寛延、宝暦、明和、安永

弘前藩主 信著、信寧

徳川将軍 吉宗、家重、家治

事 件 延享の弘前大火、延享の弘前洪水、明和大地震、安永の時疫

1781～1820年

年 号 安永、天明、寛政、享和、文化、文政

弘前藩主 信寧、信明、寧親

徳川将軍 家治、家斉

事 件 天明の大飢饉、天明3年青森大火、寛政4年西濱大地震、藩学校創立、
蝦夷地警備、弘前藩が7万石・10万石となる、天守再建、民次郎一揆

1821～1860年

年 号 文政、天保、弘化、嘉永、安政、万延

弘前藩主 寧親、信順、順承

徳川将軍 家斉、家慶、家定、家茂

事 件 相馬大作事件、痢病、轅輿事件、文政13年洪水、時疫、政争、天保大飢饉、
預手形発行、天保大鰐流れ、異国人上陸、函館開港・警衛

1861～1868年

年 号 万延、文久、元治、慶応

弘前藩主 順承、承烈

徳川将軍 家茂、慶喜

事 件 幕藩体制の崩壊

3-3 筆者略歴

福眞吉美（ふくまよしみ）：1942年弘前市生まれ。北海道に育つ。

アドレス：「zvx.yoshimi@s4.dion.ne.jp」

1963年気象大学卒業・気象庁に勤務する。

各地の気象台・測候所等に勤務し、2003年3月秋田地方気象台長をもって定年退職。弘前市に居住する。

1990年代を中心に「防災対策の効果の定量的な評価とその手法」に関する論文を、災害の研究（損害保険料率算定会：平成14年以降の損害保険料率算定機構）、研究時報（気象庁）、天気（日本気象学会）等に発表する。その内のいくつかの論文がIPCC(気候変動に関する政府間パネル)の評価報告書（1995年・2001年）その他に引用される。

2003年4月以降は、弘前藩庁日記の現代語訳と東北地方以北に昔から存在し今は珍しくなったエゾタンポポの増殖に努めていた。エゾタンポポは、数年前から庭に数万輪が咲くようになり、種子が飛散しないよう摘み取る以外は放置している。

2010年6月「弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.1 1661年～1740年」(CD)を刊行。

3-4 参考文献

内田正男、昭和50年：日本暦日原典、雄山閣出版、

児玉幸多、昭和55年：くずし字用例辞典、東京堂出版、

田沢 正、平成6年：弘前藩御日記 寛文編 上巻 自寛文元（1661）年 至寛文六（1666）年、新つがる企画、

田沢 正、平成7年：弘前藩御日記 寛文編 中巻 自寛文七（1667）年 至寛文十（1670）年、新つがる企画、

弘前市立弘前図書館、昭和45年：弘前図書館蔵郷土史文献解題、弘前市立図書館、3.

弘前市立弘前図書館、昭和49年：津軽覚え書、弘前図書館後援会、160-161.